

発表者名：原口 義座

所 属：独立行政法人国立病院機構災害医療センター 臨床研究部

抄録タイトル：インフルエンザパンデミックへの医療対応のあり方：世界的規模での  
大規模災害対策として（社会機能維持の観点も踏まえて）

現在のインフルエンザパンデミック:H1N1 への対応の観点から検討を加えた

検討項目として、実際の検疫所(成田空港)での医療側の動き、各地域での医療施設の対応を中心に、また、企業・一般市民の観点からも検討を加えた。

検討結果と考察：

現在の、比較的毒性の低い(致死率・死亡率の低い)状況においても、地域的にパニックに陥る傾向がみられた。

医療施設においても、必ずしも十分な対応がなされえない場合も多くみられた。

また検疫所の役割とその評価に関しては、意見が分かれる面もあるが、一定程度の意義はあったと考えられた。

抗インフルエンザ剤、ワクチンの投与は意義があると考えられるが、同時に副作用も念頭に置いた使用、早期の検知も必要である。

まとめ

強毒性のインフルエンザ発生時は、より大きな犠牲が発生すると考えられ、現時点での社会体制の整備を含めた医療体制の準備は更に見直す必要がある。

なお、これらの研究は、厚生労働省 新興・再興感染症研究「新型インフルエンザ大流行に備えた訓練に関する研究」主任研究者 原口 義座（国立病院東京災害医療センター）を中心としたものである。

また、分担研究者 川田 諭一(茨城県古河保健所 所長)を主編集者として、医院・診療所における対応訓練の手引き～新型インフルエンザ(A/H1N1)感染症・蔓延期への備え～(暫定版)を作成しつつある。近日中に配布の予定である。